

マツ並木歴史ばなしあれこれ③

保存管理計画策定の際の調査によって、客観的な事実を記録することに主眼を置いた「図面」的な史料やマツ並木や笠取峠の景観認知を今日に伝えている「絵画」的な史料が見つかっています。(表1参照)前者は表1の①～⑤で、並木そのものの客観的な姿を解明する手がかりとなり、後者は表1⑥～⑧で、「名所」としての並木に対する認識を読み解く手がかりになります。

表1

①	芦田宿絵図	寛政12(1800)年
②	家並絵図并前後住還絵図面	天保13(1842)年か
③	地籍図	明治26(1893)年
④	桑楊庵光『岐蘇安見絵図』	宝暦6(1756)年
⑤	中山道分間延絵図	寛政12(1800)～文化3(1806)年
⑥	笠取峠立場図 版木	年次不詳
⑦	谷文晁『名山図譜』「浅間山」	文化元(1804)年
⑧	歌川広重『木曾海道六拾九次之内』「あし田」「望月」	天保6(1835)～9(1838)年頃

今回は、表1中①の「芦田宿絵図」(以下、「絵図」)についてご紹介します。

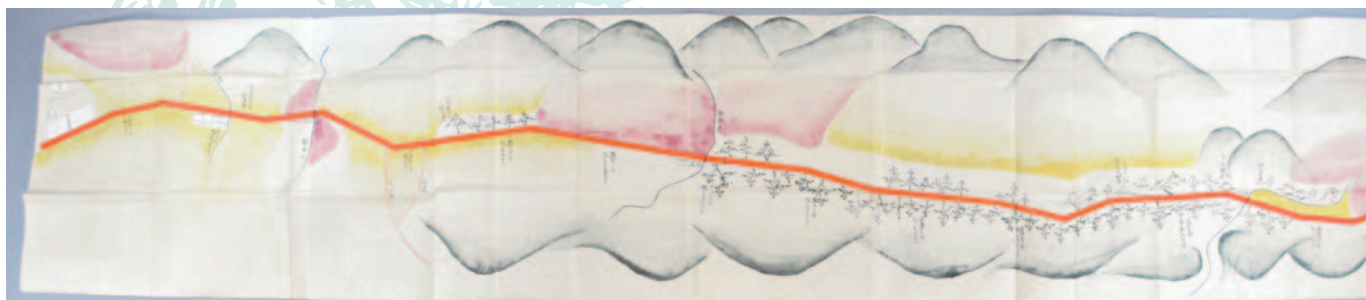
この絵図は、必ずしも並木だけを意識したものではなく、街道の全てをできるだけ正確に描いています。背景には、寛政2(1790)年の幕府の触書に象徴される、十八世紀末頃の五街道整備意識の高まりがあったものと考えられる。

樹姿と大きさの違う松が、南側に30本、北側に43本、丁寧に描かれています。1本1本の個性をとらえた樹木の描き方から、描かれた位置や本数までが事実に基づくものである可能性もあります。

ただし、小さい木は1～2本しか描かれておらず、小さな木が捨象されている可能性など様々考えられるので、絵図の描かれている並木本数の史料としては参考にとどめます。

また、この絵図には、八重原堰・八丁地堰をはじめとする水路なども丁寧に描かれています。

松の木が描かれている部分には、並木が現存するか、近年まで残存(切株や伐採記録が残る。)しており、江戸末期の松並木の景観を示す史料として価値が高く、加えて、並木周辺の大まかな土地利用も色分けにより示されており、今後の日照確保など管理のあり方について参考になるものと考えられます。



中山道芦田宿 絵図【寛政12(1800)年】 茂田井村境から、笠取峠までの絵図
土屋家文書「長野県立歴史館蔵」

(上記絵図は、芦田宿西側から松並木公園内八重原堰跡付近を示したものです。)